

## 第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

### 報告書資料 復興支援 - 22

学校名・団体名	熊本市立中島小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	震災復興プロジェクト ～希望の花を咲かせよう in 中島～

#### 〈活動・研究の意義および活動報告〉

本校は、保護者や地域とのつながりが密接で、日頃から学校行事に対して多大な協力をいただいている。二度の大地震の際にも、子どもたちが通常の学校生活を送ることができるよう、様々な面から支援をいただいた。しかし、PTA 行事、地域行事への児童の参加態度は受動的であり、常に「してもらっていることにただ参加している」という感じであった。そこで、児童が（学校が）地域行事等に能動的に参加し、保護者や地域の支援に対して日頃の感謝の気持ちを伝えていくことが大切であると考えた。

また、本年度は、隣接する障がい者支援施設の入所者の方と全児童との交流にも力を入れることとした。本施設入所者と全児童との交流は平成元年から続いている。「震災の後、入所者の方たちの不安を和らげるために、中島小の子どもたちとの交流がとても役立っている」と、施設職員の方たちが異口同音におっしゃった。一昨年度から震災復興プロジェクトを実施しているが、本年度は、児童、保護者、地域に施設入所者の方たちを加えて、「希望の花を咲かせよう in 中島」プロジェクトに取り組み、中島小校区全体に元気と希望を与えることとした。

#### 1 今年度活動の時期と内容

- 6月～7月
  - 全校児童で縦割り班編成
  - 企画委員（児童）と職員で今年度活動の企画、実施に向けての条件整備を行う。
  - 自治協議会役員会で協力依頼
  - 障がい者支援施設「ゆたか学園」職員と本校職員との話し合い
  - 学校周囲に飾る花、「お年寄りをお祝いする会」で贈る花等の栽培準備開始
- 8月
  - 「校区港まつり」に参加
    - ・地震前、児童は参加していなかったが、地震のあった年から合唱やダンスパフォーマンス等で参加し、地域の方に感謝の気持ちを伝えている。
- 9月
  - 敬老の日に行われる「お年寄りをお祝いする会」に参加
    - ・児童全員で書いたメッセージ付きの花をプレゼントする。
    - ・児童代表（6年生3人）が「今学校で頑張っていること」「将来の夢」「日頃から見守ってもらっていることや登下校時の交通指導への感謝」等の作文発表。
- 11月
  - 「熊本市小体連陸上大会」参加
    - ・児童の心のケアを行う活動の一環として、本教育振興助成をいただき、元オリンピック選手を招いて陸上教室を行い、陸上大会に参加している。本年度が3年目である。

○「老人会との交流会」実施

- ・児童全員で書いたメッセージ付きの花をプレゼントする。
- ・学年ごとに「合唱」「ダンスパフォーマンス」「音楽劇」等を発表したり、一緒に遊んだりして、お年寄りに日頃の見守りに対する感謝の気持ちを伝える。

12月 ○「一人暮らし高齢者宅」の訪問

- ・児童からの手紙、育てた「希望の花」を届ける。この様子が新聞で取り上げられる。

2月 ○障がい者支援施設「ゆたか学園」と中島小学校との交流30周年記念の旗を贈る。

- ・本校マスコットキャラクターとゆたか学園のマークを使って「ともに未来へ」を表す絵を児童が考え、旗を作成し、園に贈る。この様子も新聞紙上で取り上げられる。
- ・5月の運動会で、入所者と全児童で「交流30周年記念大玉運び」を行う。
- ・11月の学習発表会で、交流30年の歴史を発表し、一緒に歌を歌ったりダンスをしたりする。
- ・5月から3月にかけて、学年ごとに交流活動を行う。

3月 ○「校区コミュニティセンター福祉まつり」参加

- ・「地域の宝」について発表し、地域の方たちに、校区の素晴らしさを伝え、感謝の気持ちを表す。



## 2 成果

- ・地域行事に積極的に参加し、日頃の見守りに対する感謝を伝えたことで、ますます保護者や地域からの支援をしていただけるようになった。
- ・児童と保護者と高齢者の三世代一緒に活動が増えて、震災後の地域が活性化し、児童の心のケアだけでなく、地域の方たちにも元気を与えることができた。
- ・障がい者支援施設入所者の方たちに元気を与え、今まで以上に絆を深めることができた。
- ・児童の活動は、特に高齢者の方たちに元気を与えるということが分かった。地域の多くの高齢者の方たちからお礼の声が届いている。これは、児童にとっても大変良い影響があった。一人暮らしの高齢者宅訪問をした児童の感想に次のような記述があった。

「花と手紙を届けたときに『ありがとう』『大事に育てます』などと言われて、こっちの気持ちがポカポカしました。『来年も行きたいなあ。』と思いました。」

「僕はまだ一人で暮らすということがあまりよくわからないけど、感謝されたり、泣いて喜んでもらえたりしたのが、うれしかったです。これからは、会った時などに声をかけたいと思いました。一人暮らしの方は、すべて、いろいろ大変そうでした。」

「私たちが行ったとき、『いつも一人でさびしい』とおっしゃって、とても長い時間、話をされていた。一人暮らしの方のために何かできることはないかなあと、思いました。」

実際に体験をしたことで、児童はこのような気持ちを持つことができたと思う。震災後の児童の心のケアを第一の目的として始めた活動だったが、心のケアだけでなく、コミュニケーション力の向上や豊かな心の育成にも役立ったのが、このプロジェクトに取り組んだことの成果である。